

高尾亮雄、伝記上の修正いくつか

— 『日本エスペラント運動人名事典』 刊行を機に —

堀 田 穰

はじめに

『日本エスペラント運動人名事典』が二〇一三年十月、ひつじ書房から刊行された。六五〇頁を越える大冊で、もちろん高尾亮雄についての記述も収められている。しかし、高尾の名は、彼自身の記述にばかりでなく、十二名の記事に現れて来るのだ。岩橋武夫、北村兼子、熊谷鉄太郎、小林卯三郎、高瀬嘉男、富井莊雄、中原脩司、難波金之助、藤間常太郎、古屋登代子、森本二泉、和田達源がその十二名である。

中原脩司は京都の運動の中心になり、エスペラント図書や雑誌 *Tempo* を刊行。岡山の難波金之助は一九二三年第十回日本大会を初めて首都圏以外で開催。広島森本二泉は経営するみどり幼稚園を拠点に普

及活動。岩橋武夫と熊谷鉄太郎は盲人運動の指導者に。辻利助は大阪市立盲学校のエスペラント講師を務めた。藤間常太郎は『日本国際語思想史』で一九四一年の小坂賞を受賞し、戦後も『近代日本における国際語思想の展開』を著作。このように高尾の影響は広く、偉大な「種まく人」であった。

(峰芳隆、二〇一三)

とは、この事典の監修者峰芳隆の「種をまいた人びと」という文章からの言である。ついでながら、峰が挙げた辻利助が、『日本エスペラント人名事典』の索引から落ちていいる。本文には「高尾亮雄の援助で少国民新聞社の校正係」とちゃんと高尾の名が挙がっているので、辻を入れると実に十三名にもなるのだ。

二葉亭四迷に始まって、黒岩涙香、柳田国男、高村光太郎、出口王仁三郎、手塚治虫等々から梅棹忠夫にいたるエスペラント運動に関わった人々の歴史は、社会主義運動史ともまたかなり違う、もう一つの近代史といえる相貌を持っている。長年の研究がこのような形で実ったのは慶賀すべきだが、高尾亮雄については、伝記上の新事実も出てきており、これを機会に断片的ではあれ、気がついたことを書き留めておきたい。

一、死亡年月日の問題

高尾亮雄の死亡年月日は、事典では一九六四(昭和三九)年八月十二日となっている。これは先行する『近代日本社会運動史人物大事典』(一九九七)の記述を踏襲したと思われる(以後、『日本エスペラント運動人名事典』

を『エス事典』、『近代日本社会運動史人物大事典』を『社会運動事典』と略称)。『社会運動事典』の高尾の項の筆者は武内善信で、その論文「高尾楓蔭小論―初期社会主義とお伽芝居―」(一九九六)では、その日付の根拠を堀田の「高尾亮雄とその仕事」(一九九二)としていた。拙論の典拠は、そこにも記したように『日本口演童話史』「大阪府」の金津正格・藤野福雄の以下の記述である。

戦後相当期間別府に隠屯。やがて思い出深い大阪に移り、大阪市生野区東福寺別院の一隅に身をひそませていたが、のち大阪府立養老院に送りこまれ、昭和三九年八月一二日、九一才(一八七九―一九六四)でこの世を去る。

(内山憲尚、一九七二、二七二頁)

これしか、明確に死亡の年月日を記述した史料がなかったので、八月十二日(水曜日)という日付を採用せざるを得なかったのだ。しかし、『日本口演童話史』については、口演童話研究の一環として人名索引を作成していく過程で、相当あやふやな部分があることに気が付き、かなり批判的に見ないといけないと感じていた。そして、エスペラント関係の資料を読んでいて、高尾の死亡を八月十四日(金曜日)と書いてある記事を見つけたのだ。

高尾亮雄氏がなくなられたらしいときいて調べてみたところ事実でした。一〇年前からみよりもなく東福寺大阪別院に寄食していられたが昭和39年8月5日、富田林市の老人ホーム柳生苑に移り、同14日死去

れたよし、老衰のためと思われる。(奥村林蔵)

(奥村林蔵、一九六五)

(財)日本エスペラント学会による『エスペラント LA REVUO ORIENTA』誌、第三十三年第六号、一九六五(昭和四〇)年六月一日発行の「ひ・ろ・ば」欄、十七頁での奥村林蔵署名の小報である。『エス事典』の高尾の項の協力者に奥村林蔵氏の名前が挙がっている、あるいは事情を承知した上で八月十二日のまま動かさなかったかも知れないが、『日本口演童話史』よりも信用できそうな記事なのである。柳生苑には書面で問い合わせたが、返答はなかった。八月五日に移され、十四日に亡くなったということ、たった十日間程しか居なかったわけで、そのような老人の記録が、戦後の混乱期は過ぎていたとはいえ、どれだけ残っているか、と考えるとそれも無理はないだろう。著作権ですら五十年で切れるのだから、個人情報保護法というような縛りは関係がないと思われるが、そういう縛りも担当者の頭にあるのかもしれない。

一、家族の問題

晩年の高尾は一九五三(昭和二八)年前後三年程を、古屋登代子と別府で暮らしていた(堀田、二〇二二)ことがわかっており、身寄りがないと思われていた。ところで『日本口演童話史』「大阪府」「1. 大阪お伽倶楽部」の記述の仕方では信用ならないのは、元になった資料の典拠を示さずに借用している点が多々あることに気が付いたからである。例えば高尾の風貌の描写がある。

この子供会(大阪三越……引用者)のとき、毎回あいさつをするのが高尾亮雄(たかお・あきお、号を楓蔭、朝日新聞社入社前)で、大本教信者のように当時流行したらしい長髪、黒洋服に縞ズボン、黒のボヘミアン・ネクタイを締めて、あいさつの合間にオールバックにした長髪を、手でかきあげるのが強い印象を与えていたという。

(内山憲尚、一九七二、二七〇頁)

「〜という」との伝聞形にしているものの、『日本口演童話史』では何を根拠にしたのかは判らない。次の引用と比較していただきたい。

さて、これらの狂言が始まる前に、子供新年会の挨拶をするのが、高尾亮雄氏でありました。

大正末期に流行した大本教信徒のような長髪を早くもこの時代に彼はしていました。そして黒洋服に縞ズボン、黒のボヘミアン・ネクタイを締めて、言葉の合間にオールバックにした長髪を、手でかき上げていたのが強く印象に残っています。

(永見克也、一九六九、三八頁)

これを読めば、船場の会『船場』第五号、一九六九(昭和四四)年八月一日発行の雑誌に掲載された「大阪三越と高尾楓蔭」という永見克也の文章を、『日本口演童話史』が取り入れているのは明確だろう。永見はまさに船場の子ども時代、三越の子供会に参加した子どもの当事者として証言しているので、出典を明らかにして収録した方が、通史としての『日本口演童話史』の史料価値も上がったはずなのに、それがされなかったこと

が悔やまれる。『日本口演童話史』の歴史意識が問われる所である。

ともかくも、永見克也はこの「大阪三越と高尾楓蔭」の中で、高尾の家族についての数少ない記述を残しているのだ。関連して死亡のこと、またこれもあまり他の資料では見られない、高尾の和歌や俳句が載せられていることも含めて引用しておく。

その後彼は、朝日新聞社に入社して(正式社員でなかったかも知れませんが)、その頃出来た朝日会館の運営などに大いに力を致したようですが、戦前定年退職し、昭和四十年河北の養老院で八十才位で亡くなられました。

朝日新聞社の北岸佑吉氏に寄せられた、昭和三十六年五月十七日附消印のある、喜多村緑郎丈が亡くなった時の便りをここに収録して、彼の一端を知るよすがにして欲しい。

原文のまま

逝いた喜多村緑郎についてのご執筆、友人として厚く厚くお礼申し上げます。彼は親友であり、ある意味での先輩、師匠にもあたるわけです。

緑郎丈と大阪浦江聖天さんの蓮池に遊んで

君ととも夜を徹して語り合い

その暁に聞く花はちすかな

亡き人に供えまつらん蓮めしを

—たかおあき翁—

近詠

春雷やビンの金魚はビクつかず

黒椀にテンコ盛りした豆の飯

× × ×

高尾氏の実の娘さんが名古屋に住んでいられるとか聞いていますが、その住所もわからないので、現在これ以上の事を同氏について書けないのが残念です。
(永見克也、一九六九、三九〜四〇頁)

喜多村緑郎は新派の俳優。一八九六(明治二九)年大阪の角座を本拠に高田実、秋月桂太郎、小織桂一郎らと「成美団」を結成し、壮士芝居の演技からリアリズム劇術の創造をめざした頃に、お伽芝居をしていた高尾亮雄とも知り合ったのだろう。高尾亮雄「お伽芝居『うかれ胡弓』の脚本を記録しておくに就て」(高尾亮雄、一九二九)には地方巡業に出た高尾らのお伽芝居劇団が、名古屋、千歳座で村田正雄、秋月桂太郎、喜多村緑郎を楽屋に尋ねて公演の援助を受けたことを書いている(高尾、堀田、一九九一、三三頁)。喜多村には大部の『喜多村緑郎日記』もあるので、一度高尾の名前を調査しなければと思っているがまだ果たしていない。武内善信の詳細なお伽劇団活動についての研究によれば、名古屋千歳座でのお伽劇団の公演は、一九〇八(明治四二)年九月十一日〜十三日のことであった(武内善信、一九九六)

そして高尾の娘が名古屋に住んでいるという伝聞を永見が書いている。これについては皆目わからないが、

また、まったく別の所から、高尾の家族についての情報が入って来た。

高尾楓蔭未亡人の孤影

オールドファンほろり

昔のオールドファンにとっては涙をさそうお話―このほど、箕面市白島の老人ホーム永寿園を訪ねた同市社会福祉協議会副会長藤野富久雄さんが、同ホームに収容されている当年九十才の高齢の高尾かねさんが、その昔大阪のお伽芝居や、新聞記者で知られた高尾楓蔭サンの未亡人とわかった。毎日新聞に関係のあった当時の藤野さんを知っていた未亡人は、トットツと涙の思い出話で数時間を過したとのこと、楓蔭サンは七十年前大阪日報記者だったが少年のためとおトギ芝居を計画「小公子」の芝居を中之島公会堂で公演したのがはじまりで晩年まで「おトギのオジサン」でこどもたちのアイドルだった。小柄でクールな風采、長髪を蓄わえスタイリストとしても知られていた。晩年は大阪日報から朝日新聞事業団などで活躍していた。楓蔭の名は箕面有馬電鉄が開通したとき箕面駅終点に居を構え、もみじを愛して雅号にしたもの。

(週刊北摂朝日、一九七二)

灯台もと暗し、とはこのことで、二〇一三年一月に高尾亮雄についての講演依頼を受けた際、箕面市立中央生涯学習センターからこの記事を提供された。そういえば、高尾は箕面に在住していたと長年の不明を恥じたのであった。この思い出話の内容の記録が残っていればよいのだが、それは未発見とのこと。しかし、高尾亮雄

の妻が高尾かねといふのであったことがこれでわかる。また、訪ねた藤野富久雄といふのは、『日本口演童話史』『大阪府』の著者の一人藤野福雄ではないのか。これは、藤野は何としてでもどこかに発表しておくべきだったのではないかと切齒扼腕の思ひである。

三、生い立ちの問題

『社会運動事典』『エス事典』に共通の生年月日の一八七九年二月二十一日といふことについては、何の資料も持たず、コメントのしようがない。そもそも生まれ育ちについてはよくわからないのだ。

大津市内の酒屋の息子で同志社大学卒業と言われているが、はっきりしない。幼くして父や兄と死別し、母親に育てられる。十五歳のとき一時上京する。一九〇〇明治三三年春、京都新聞の通信員として半年ほど清国に赴く。
(『社会運動事典』、一九九七)

滋賀／同志社／号楓蔭／一九〇〇年『京都新聞』通信員として清国へ。
(『エス事典』、二〇一三)

武内は踏み込んで、「大津市内の酒屋の息子で」といふ伝聞を記している。これについてもまた調査を要する文章を手元に持っている。本来調査をすませてから公表すべきだろうが、ぐずぐずしているうちにあれこれ

失ってしまうので、誰かにやってもらいたいという希望も込めてここに収録しておく。

▲チト手前味噌のようなのですけれど、回顧の資料に書いておきたいのです。私は元來巖谷小波先生と郷を同じくしてをるのです、少年時代東京に出てをる時も親戚に当るある軍医の家へ世話になってをったのですが其の軍医は故一六翁の女婿なので小波先生とは兄弟になる訳です、丁度宅も巖谷本家と隣合つてをり庭から行き通いもできる、そんなことから常に硯友社の人達とも馴染だったので、私の監督の軍医というのは私が文学カブレになりはしまいかと仲々やかましく近づけささなかつたのです、けれども私は隠れ隠れて文学の趣味に憧憬して、とうとう後に至つて筆で飯を食うことになつてしまつたのです

(高尾亮雄、一九二二)

まず、巖谷小波は滋賀県水口出身であるから、滋賀県が郷里というのはまちがいあるまい。巖谷一六の女婿という軍医というのが誰なのか、日記もあり、研究もされているから巖谷小波に詳しい人はすぐ思い当たるのかもしれないが、こちらにはわからない。小波自伝の『我が五十年』「二人の妹」によると、妹の菊枝の夫が海軍の軍医であつたというから、あるいはと思つがわからない。小波の父、巖谷一六はまず田鶴と結婚し、立太郎、かねの一男一女を授かつたが、田鶴と離縁し、立太郎は一六のもとに残り、かねは田鶴に引き取られてゐる。そして八重と再婚し、八重には連れ子のお榮がいた。それから辦次郎、幽香、三千尾の一男二女を生む。そして小波を生んですぐ大病で八重は死ぬ。一六の三度目の妻、茂登は瑤芝子(よしこ)、菊枝、春生、冬生の

二女二男を生んでいる。可能性を考えると、かね、榮、幽香、三千尾、瑤芝子、菊枝と六人もいるのだ。ともかくご存知の方ご教示をお願いしたい。

『エス事典』の刊行のおかげで、いろいろよくわからないあやふやな情報を並べ立てさせてもらったことをお許しいただきたい。長年の宿題なのだが、一人で抱え込むより、大勢でかかった方がよいと考えた。『エス事典』で高尾と関わった人名では、管見の限りでは、森本二泉、難波金之助、高瀬嘉男などは『日本口演童話史』にも名前が見受けられる、口演童話運動にも関わった人々であった。各守備範囲はしっかり掘り下げなくてはならないが、より学際的な交流でこれからも楓蔭高尾亮雄の足取りを辿りたい。

参考・引用文献

- 巖谷小波『我が五十年』一九二〇、東亜堂
- 巖谷大四『波の登音―巖谷小波伝』一九七四、新潮社
- 内山憲尚編『日本口演童話史』一九七二、文化書房博文社
- 奥村林蔵『高尾亮雄氏がなくなられた』『エスペラント LA REVUO ORIENTA』第三十二年第六号、一九六五年六月一日、(財)日本エスペラント学会
- 近代日本社会運動史人物大事典編集委員会編『近代日本社会運動史人物大事典』全五巻、一九九七、日外アソシエーツ
- 柴田巖・後藤斉編『日本エスペラント運動人名事典』二〇一三、ひつじ書房
- 高尾亮雄『お伽芝居『うかれ胡弓』の脚本を記録しておくに就て』初出、『子供の世紀』一九二九年一月～五月、『大阪お伽芝居事始め―うかれ胡弓』回想と台本』所収、一九九一、関西児童文化史研究会
- 高尾亮雄『お伽芝居と私』『文藝書報』第三号、一九二二年三月
- 高尾亮雄著・堀田穰編『大阪お伽芝居事始め―うかれ胡弓』回想と台本』一九九一、関西児童文化史研究会

「高尾楓蔭未亡人の孤影」『週刊北撰朝日』第九九五号、一九七二年六月十一日

武内善信「高尾楓蔭小論―初期社会主義とお伽芝居―」『ヒストリア』第一五〇号、一九九六年三月、大阪歴史学会

永見克也「大阪三越と高尾楓蔭」『船場』第五号、一九六九年八月一日、船場の会

堀田穰「高尾亮雄と女たち―菅野スガ・三笠万里子・古屋登世子」『人間文化研究』第二十九号、二〇一二年十二月七日、

京都学園大学人間文化学会

堀田穰「高尾亮雄とその仕事」『大阪お伽芝居事始め―「うかれ胡弓」回想と台本―』一九九一、関西児童文化史研究会

峰芳隆「高尾亮雄（一八七九―一九六四）種をまいた人びと（七）」『エスペラント LA REVUO ORIENTA』第八十一卷

第七―八号、二〇一三年七月一日、（一財）日本エスペラント協会

* 「高尾楓蔭未亡人の孤影」『週刊北撰朝日』第九九五号、一九七二年六月十一日、についてはおそらく『週刊北撰朝日』がかなり地域限定のミニコミであったと思われる、コピーのみで原本を見ていない。保管されている図書館も少ないのではと思われるので、画像（資料一）として収録しておく。研究に役立てば幸いである。

昔のオールドファッションにと 七七箱大目日記帳だ
 こては懐かきお宝― たがひ年のなほ若し
 のほど、裏面市街の巻入 開を翻し小全この影
 本ムカホの懐かきお宝 巻入高公巻筆公懐た
 社会福祉館前庭裏の のがほまりで晩年まで
 萬久種をが、阿ホムに おとのオヤサニで
 取貯されてる年九十才 もたのナイトルだつた
 の高々の風かほき、 小柄でクールな葉、豊茂

高尾楓蔭未亡人の孤影

ド その北大阪のお伽芝居や、 香雪や多むつては
 新聞記者で知られた高尾楓 ても知られてた。晩年は
 殊尊んの巻入とわか、 大阪目録から高目開葉
 た。毎頁新聞の巻のあつ 困ひて困窮してた。風
 位時の種貯さを知つて 味の名は新聞種貯袋が
 いた来「入」ムフンで 置した高尾面高尾高
 葉の思ひは高尾高尾高尾 巻入、もたは巻入で
 高尾高尾高尾高尾高尾 高尾高尾高尾高尾

(資料一)